大阪商業大学学術情報リポジトリ

「摩訶大将棋起源説反駁」に対する返答

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューメント産業研究所 公開日: 2021-12-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高見, 友幸, TAKAMI, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1079

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「摩訶大将棋起源説反駁」に対する返答

高　見　友　幸

Ⅰ．はじめに

１．概要

本稿は、清水康二氏の「摩訶大将棋起源説反駁」（文献［１］：以下、反駁論文）の中で述べられている様々な批判と助言に対して返答するものである。その批判と助言は「摩訶大将棋の復刻　－古代日本の大型将棋に関する考察－」（文献［２］：以下、復刻論文）の内容に対して投げかけられている。

反駁論文の最終章Ⅳ「まとめ」の章は、「新たに提出された摩訶大将棋起源説について、定説を墨守する立場から批判的に検討した」と始まり、論文の最後は、「上記の検討結果からは、平安小将棋から各種大型将棋が誕生したという定説を変更する必要はない」で終わる。反駁論文の主張はこれらの文章に尽きると言ってよい。本稿の目的は、この主張に対する異議を明確に示すことである。それは同時に、従来の将棋史で定説とされてきた説に対し、その根拠がきちんと検証されてきたかどうかの疑問を投げかけるものでもある。

将棋史研究の現状は、起源の問題についてだけ言えば、大別してふたつの説に分かれる。平安小将棋が将棋の起源であるとする従来からの説（以下、小将棋起源説）と、最近になって提示された摩訶大将棋起源説、つまり、大型将棋が順次小型化して小将棋が作られたとする説とに分かれる。反駁論文の内容は、そのタイトルどおり摩訶大将棋起源説に対する反駁だけが書かれているが、その反駁と対比させて小将棋起源説の正当性が説かれているわけではない。本稿は反駁論文に対する返答を主旨とするものの、それと同時に、反駁論文がよって立つ小将棋起源説の疑義や問題点も提起したい。

摩訶大将棋をはじめとする大型将棋については平安時代以前の文献資料はほとんど存在しない。そうした状況で文献的検証のないことが指摘されがちであるが、実は、この点は小将棋についても同じなのである。将棋の古典籍だけに基づく限り、古代将棋史の解明は困難であると

言わざるを得ない。したがって、解明の突破口は、将棋とは別の領域に現れるのであるが、大型将棋史の場合は、初期平安京の復原に関する問題が手がかりとなった［3］［4］［5］［6］。未解明事項の多い大型将棋史が最近になって進展を見たのはこうした事情による。

2．定説・仮説・通説・私見

まず、前節で使われている「定説」という語句の意味を確認しておきたい。本稿では、定説以外にも、仮説、通説、私見の語句を用いるが、それらを以下のように定義する。

定説：学術的にほぼ確からしい説。きちんとした検証を経ている。

仮説：多少の検証を経た上で提起された説。まだ十分な検証ではない。

通説：多数の人が賛同する説ではあるが、ほとんど検証がなされていない。

私見：検証のなされていない個人的な考え方。

通常は、私見->仮説->定説と進展するか、私見->通説と進展する。学術として説を確定させるためには、言うまでもなく、客観的な検証が必要である。

ところで、歴史学では、これまで史実だとされてきたことが実は違っていたということがしばしば起こる。これは、その史実が「通説」だったということにすぎない。将棋史の分野でもこういった事例は多い。反駁論文では、「定説を墨守する」「定説を変更する必要はない」という表現で「定説」の語句が使われているが、この使い方は正しくないであろう。摩訶大将棋起源説に対する批判は、反駁論文の中ではすべてが「通説」または「私見」に基づく批判であることが以降の章で示される。これは、摩訶大将棋起源説と対立する小将棋起源説が「通説」または「私見」であることを意味する。実際、将棋史の学術論文や単行本の説には、検証されていない説が多くある。ただし、これを見抜くのは将棋史研究家でない限りむずかしい[1)]。

Ⅱ．陰陽五行説との関連性

反駁論文Ⅳ章の第２段落（以下、Ⅳの２）には、「摩訶大将棋、大大将棋が陰陽五行説に基づいて設計されたという仮説は、今のところ根拠が薄い」とある。その理由として、12種での駒の分類や陰陽での駒の分類が不明瞭であること等が挙げられている。このような反論は、研

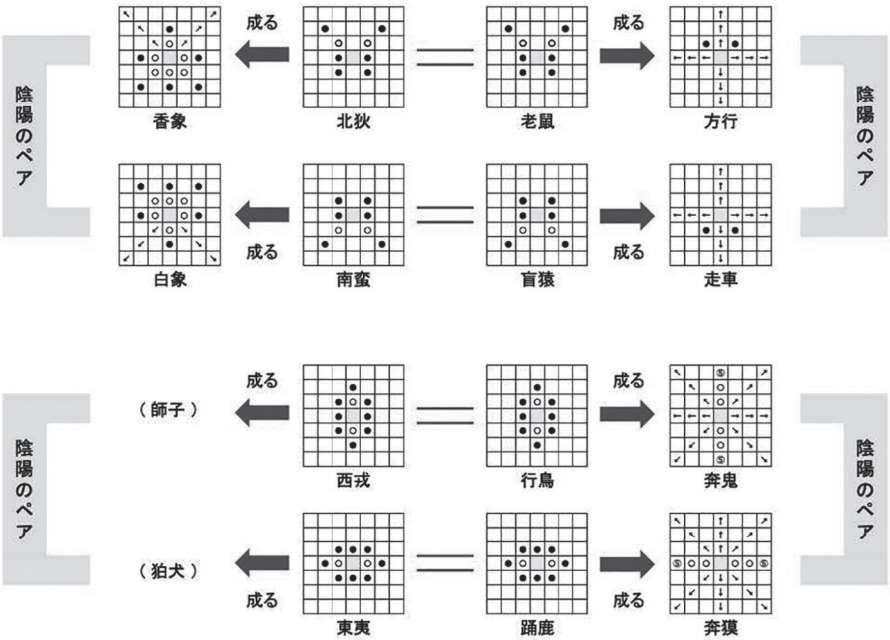
究初期にはよく出されたものであるが、復刻論文にはさらに進んだ成果が載せられている。清水氏はこの成果を執筆時には参照されていなかったのであろう。図１に、反駁論文が取り上げていない大大将棋の駒の陰陽に関する知見を示した。詳細については、復刻論文の２－５節（p.29-p.45）を参照されたい。

大型将棋の駒が十二支や陰陽の駒に分類可能であるとする考え方に対して、よく受ける反論は「十二支がすべて揃っているわけではない」というものである。実際、十二支の駒のうち、未（ひつじ）に対応する駒はない。戌（いぬ）の駒を悪狼に対応させると、狼は犬とは違うという反論が出る。このように、十二支の問題を、駒の名称や12という数だけにこだわれば、それらは水掛け論に終わる。反駁論文Ⅲ章の１節（以下、Ⅲの１）でなされる議論も同様であろう。

こうした観点での議論は、たいていの場合「私見」である。ただし、各研究者の研究の方向性が示されるという点においては重要であろう。十二支のうち10駒ないし11駒までがほぼ合致したとき、それを十二支の現れと見るか、そうでないと見るか。それは個々の研究者が思い描く研究のシナリオによるであろう。我々は十二支の現れと見た。陰陽についても、金と銀、青と白、師子と狛犬等様々な対比でみつかり、一対を成す駒名が、駒の動きの対称性にも反映されていることがわかる。したがって、陰陽の概念も駒に組み込まれていると見た。そこで、あるに違いない「十干」の駒を探しに行くことになる。十二支の駒はないと見るなら、十干の駒を探しには行かないのである。

駒に陰陽五行説が組み込まれているという説（以下、駒の陰陽五行）が「私見」から「仮説」に移行するのは、大型将棋の駒に明解な十二支、十干、五行、陰陽の枠組みを作ることができた時点である。つまり、大型将棋の駒を六十干支の表にきちんと割り当てることができた時点である。

反駁論文では、十干、五行の駒に対しても、名称との関連だけに拘っているように思われるが、十干は駒の名称として現れるわけではない。六十干支の表が成立することにより抽出される属性なのである。反駁論文（Ⅲの１）では、「・・・五行が持つ基本的性質と比定した駒の属性についての関連の有無が説明されていない。」とある。おそらく、木の性質の駒、火の性質の駒等が特定できないということなのであろうが、そういう直接的な関連ではないのである。次のように表現すれば、わかりやすいかも知れない。この宇宙は、木、火、土、金、水の5つから構成されている。将棋の宇宙は、人の駒（歩き駒）、動物の駒（歩き駒）、踊り駒、走り駒、成り駒の5つから構成されていると、表現できるのである。名称や五行の属性との関連ではなく、駒グループの分類の数5つが五行に対応するものと見ている。五行は陰陽で半分ずつに分かれ



					奇犬						奇犬					
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
左車	横行	猛牛	嗔猪	悪狼	盲熊	猛豹	盲虎	前旗	盲虎	猛豹	盲熊	悪狼	嗔猪	猛牛	横行	右車
青龍	香象	北狄	西戎	木将	石将	鉄将	銅将	飛車	銅将	鉄将	石将	木将	東夷	南蛮	白象	白虎
	竪行		師子		水牛		銀将	奔王	銀将		馬麟		狛犬		角行	
反車	古鵄	変狸	老鼠	猫又	行鳥	麒麟	金将	近王	金将	鳳凰	踊鹿	飛龍	盲猿	変狐	毒蛇	反車
香車	鉤行	鳩槃	方行	龍王	奔鬼	大龍	左将	玉将	右将	金翅	奔獏	龍馬	走車	夜叉	天狗	香車

図１．大大将棋の駒の陰陽と成り駒および初期配置との対応。大大将棋の駒の動きは、古文書により様々な動きが伝わる。正しい動きを決めるために、駒の陰陽のペアと成駒（上図と中図）、初期位置（下図）との関係性を利用することができる。たとえば､北狄と南蛮は駒名（北と南）からも駒の動き（前後反転の動き）、初期位置（左右対称の位置）からも陰陽のペアであることを特徴づけている。３つの同じ項目での対応が、北狄と南蛮の成駒である香象と白象についても成立する。こうした系統的な関係性は、北狄、南蛮と動きが同じ駒（しかし成駒は違う）である、老鼠（＝北狄の動き）と盲猿（＝南蛮の動き）についても成立している。大大将棋の駒の動きの大きなばらつきは、以上のように、陰陽の駒同士に動きと初期配置の対称性があることを仮定して、古文書の記載から正しい情報を抽出することができる。こうした結果は、駒に陰陽の概念が存在したことを示すものである。

十干となり、十干と十二支との組み合わせで六十干支ができる。

復刻論文には、摩訶大将棋の六十干支（復刻論文の図21）と大大将棋の六十干支（復刻論文の図34）が掲載されている。これらの図は駒の陰陽五行と駒の動きの復刻を関連付けるものである。Ⅳの２には、「陰陽五行説との関連を前提とした資料操作の結果に過ぎず、‥」とあるが、上記の図21、図34のどの部分に資料操作があるのかを具体的に指摘する必要があろう[2)]。清水氏が言う資料操作云々については、後の章で、銀将の動きを例にして再度取り上げたい。

Ⅳの２に「・・陰陽五行思想は日本文化に取り入れられていたのだからそれが、直接的、間接的に利用はされたものの、仏教思想の影響をより強く考慮すべきであろう」とある。駒の陰陽五行について言えば、上述のとおり、それは駒の名前という表層的なものだけを参照して組み立てられたものではない。このことは強調しておきたい。陰陽五行は、駒の動きのパターンといった内在的なものにも明確に反映されている。したがって、陰陽五行は、時々のイメージで順次取り込まれたわけではなく、全体が設計の産物ということに帰結する。ところで、清水氏が陰陽五行思想の対比としてあげているのは、将棋への仏教思想の影響である。本稿の主旨ではないので、深くは述べないが、この考え方は「私見」の域を出ないであろう。我々は駒の陰陽五行を示すために六十干支の表を検証のひとつとして用いているが、一方で、仏教思想がどのように将棋に反映されているのであろうか。

Ⅲ．大型将棋の駒が交点置きであること

反駁論文Ⅳ章の第３段落（以下、Ⅳの３）には、「大型将棋の交点置きを積極的に推す根拠はない。」とある。その主要な理由として、反駁論文では、「目」という言葉の解釈として、「目」＝マスと考えるべきであるとする。我々は、囲碁で使用されるように、「目」＝交点とみなして議論を進めていることへの反論である。しかし、このように名称だけの議論で、交点置きかマス置きかが解決することはない。名称だけの議論は、Ⅱ章で取り扱った十二支の問題と同様、水掛け論である。一方の研究者は交点置きという方向性で研究を進め、一方の研究者はマス置きという考え方で研究を進めた。研究の行末において議論がなされるべきであろう。

さて、将棋史の学術論文や単行本では、平安小将棋は当然のようにマス置きの図として掲載されている。ただし、こうした図は、現代将棋がマス置きなのだから、平安小将棋もマス置きに違いないとする単なる「私見」なのである。それが「通説」となっているだけである。平安

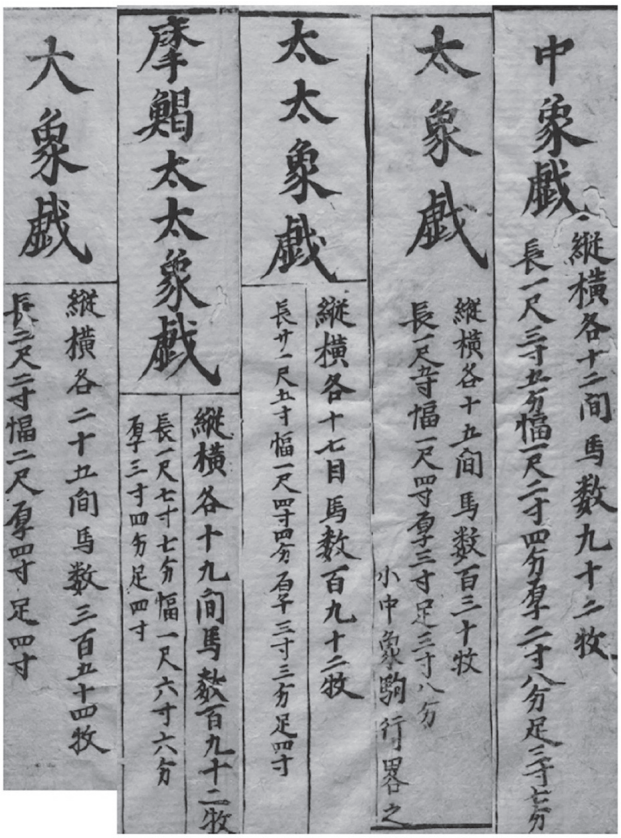
小将棋を含め、古代の将棋がマス置きだったことを積極的に推す根拠は、管見の限り、これまで提示されたことはない。

清水氏は、大型将棋の交点置きを積極的に推す根拠はないと主張するのであるが、一方で、平安小将棋のマス置きの根拠については問題にしない。同様の反論スタイルは、前章でも見られた。駒の陰陽五行説は根拠が薄いとする一方で、その対案として主張する仏教思想については、根拠とすべき材料が提示されていない。

ところで、将棋を中国からの伝来と想定した場合、「目」＝交点と考え、駒は交点置きと見る方がむしろ妥当なのではないか。伝来元の中国象棋が交点置きであるのに、伝来先ではマス置きだったとするのは不自然なのである。

大型将棋の駒が交点置きであるという説（以下、交点置き説）が「私見」から「仮説」に移行するのは、復刻論文の図78と図79がわかったときからである。同じ図面を図２に再録した。図２の右図に注目されたい。大大将棋は横16マス（つまり、横17目）と考えることで、他の大型将棋の盤の大きさと非常によい対応を示す。諸象戯圖式の記述に従えば、将棋種によらず１マスの大きさ（約６寸）と左右の余白は同じであり、将棋種のマスの数に応じて幅は大きくなる。各将棋盤の大きさの比例関係が正しく伝わっていることに驚かされるが、それ以上に、大大将棋だけは交点置きだったという情報が残されていたことに驚く。諸象戯圖式の記載を信頼できないとする見解もあるが、５つの将棋の横幅がきれいに連動して記載されるという偶然、その上で17間を17目と書き誤ったという偶然が起こるものだろうか。

これに加えて、次章で論点にする平安京拡張説との関連からも、古代の大型将棋が交点置きだった可能性を示すことができる。上述のとおり、大大将棋は17目の交点を使うが、これは平安京の条坊の東西方向の目の数と一致する。さらに、大大将棋の駒の並びに、平安宮の形状に沿って将の駒が配置されている。なお、平安京拡張説を受け入れる場合、摩訶大将棋の交点置きからマス置きへの移行も説明可能である［４］［８］。諸象戯圖式の記述は、摩訶大将棋がマス置きに移行した最終段階の状況を示すものである。詳細については、復刻論文を参照にされたい。



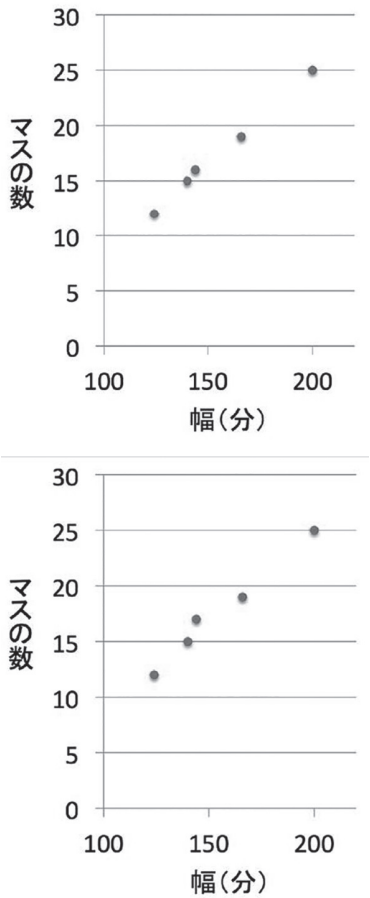


図２．左）諸象戯圖式から各大型将棋の見出し欄を抜き出して並べたものである。各将棋盤の横方向の大きさに注目されたい。たとえば、大大将棋では横17目、大将棋では横15間とある。大大将棋以外の将棋ではすべて間という表示であることに注意されたい。間はマス置き、目は交点置きを意味すると見ることができよう。各将棋には盤の幅が記載されている。たとえば、大大将棋では１尺４寸４分、大将棋では１尺４寸である。横のマスの数と幅をプロットしたものが右図である。右）上図では大大将棋を16マス（記載の17目が正しいとすれば、マスは16マスである）とした。下図は大大将棋を通説どおり17マス（この場合、記載の17目は17間の間違いとみなす）とした。上図の場合、各将棋の盤のプロットが、きれいな一直線上にのることから、将棋盤の幅がマスの幅に比例して増えていることがわかる。このことから、大大将棋の横のマス数は17目＝16間であると見てよいであろう。下図では、大大将棋のプロットだけが大きくずれるが、これは横のマス数が17間ではないことを示す。

Ⅳ．平安京拡張説と大型将棋の関連性

反駁論文Ⅳ章の第４段落（以下、Ⅳの４）には「・・摩訶大将棋と平安京の条坊の一致を強調するが交点置きに確かな根拠がないうえ、よって立つ平安宮平安京拡張説も誤解やごく少数の研究者が主張するにすぎない。」とある。この箇所は複数の論点がかぶっているため、まず論点を整理しておきたい。

交点置きの根拠がないという点については、前のⅢ章ですでに述べた。やや引き下がった考え方をとるとしても、マス置きの根拠も同様にないのである。両方を検証すればいいのではないだろうか。

まず前のⅢ章の立場で検討を進める。当初の将棋は交点置きだとしよう。現代将棋はマス置きであるから、歴史のある時点で、交点置きからマス置きに切り替わらねばならない。この理由を説明するのが平安京の条坊と将棋盤との一致である。平安京が拡張すれば将棋盤もそれに合わせて変化を受け、マス置きに変わったのである。

次に、当初の将棋はマス置きだとしよう。しかし、中国象棋は交点置きである。中国から日本への伝来を想定したとき、では、交点置きからマス置きに変わったのはどの段階なのかという新しい問題が出てくるであろう。反駁論文に記述はないが、清水氏はこの問題を伝来前の中国で変わったのだろうと仮定している［７］。しかし､その根拠はどこにも示されていない。「私見」なのである。この「私見」に基づけば、マス置きの将棋が伝来したのだから、当初の将棋はマス置きに違いない。結局は、難問を中国の方に追いやっただけで、根本的には解決を見ていないのである。

一方、伝来当初は交点置きだったとする説は、上述のとおり、平安京拡張説と大型将棋をリンクさせることでこの難問の解答例を提示する。この解答例が正解かどうかは今後のさらなる検証に委ねられる。その検証においては、平安京拡張説の可否が非常に重要である。本当に初期平安京は、後世の平安京よりも小さかったのかどうか。仮に小さかったとしても、平安京の大きさと将棋盤の大きさがどうして連動するのか。この問題を解く鍵は、都城の思想と天円地方の思想なのである。未だ解明途上であるが、その詳細は最近の文献［５］［６］［９］を参照されたい。なお、反駁論文のⅢ章の５節で述べられている平安京拡張説に対しての懐疑的見解は、いくつかの論文を引用してなされているものの、すべての議論が覆い尽くされているわけではないことを指摘しておきたい。この点については、文献［10］が詳しい。

Ⅴ．平安小将棋について

反駁論文Ⅳ章の第５段落には「仮に摩訶大将棋から平安小将棋が誕生したとするなら、「桂馬」「香車」はもっと強力な駒が採用されたはずである。」とある。この文章における清水氏の見通しは全く正しい。そのとおり平安小将棋の桂馬と香車は強力な駒である［11］。しかし、この文章における主張は、その見通しとは全く逆の見解のもとでなされているのである。つまり、桂馬と香車は「弱い」駒であるという前提なのである。

桂馬と香車がなぜ弱い駒となったかについては、反駁論文ではなされていない。また、桂馬と香車がもっと「強い」駒だった可能性についての議論は、本稿では参考文献として文献［11］を紹介するにとどめる。

ところで、桂馬と香車がなぜ弱い駒、つまり、八方桂の前方だけの動きなのかという理由については、これまでの論文では示されたことがない。桂馬と香車は弱い駒として伝来したのだろうという「私見」はあるものの、その根拠は説明されていないのである。詳細は、後のⅨ章の桂馬の動きの議論を参照されたい。

Ⅵ.「岑順」の物語と大型将棋

反駁論文Ⅳ章の第６段落には、「・・「岑順」の物語に描かれる宝応将棋は大型将棋類とする見解が示されたが、いずれの根拠も有効ではなく、・・」とある。文学作品に対する解釈の問題であるため、岑順の内容をどのように捉えるかは諸説あり得るであろう。反駁論文では、岑順の物語は６種の駒を使う中国象棋の比喩と見る。我々の見解は、駒数多数の将棋種の比喩と見る。対立する解釈の細部を取り上げた水掛け論はここでは省略したい。

反駁論文では、物語の語句や記述を、駒数の問題と関係させるだけの議論がなされている。しかし、岑順の物語は、将棋の見た目だけを捉えた比喩ではなく、古代の将棋がもつ将棋の本質をきちんと表現したものであると我々は見ている。復刻論文で「宣室志」を例に引いた理由は、遊戯の内容が、文学上に、正確な比喩として挙げられているいう点である。「岑順」の場合、その正確さは、見た目の駒数に対する記述にも十分現れているが、「岑順」の著者は、将棋の呪術性に対する表現により大きな重点を置いたのではないだろうか。以下、「私見」であるが、将棋を呪術として捉えたときの、岑順の物語の解釈を示す。

まず、主人公の岑順は物語でどのような役割を担ったのかという点である。岑順が見た夢の風景を語るというだけの役割ではない。この物語は、「天子南面」で見た呪術としての大型将棋の対局が描写されており、岑順は「天子」の比喩なのである。物語に登場する２文字の漢字から成る駒名と陰陽五行思想との関連については、復刻論文に述べられている。陰陽五行思想の表現は駒数多数でこそ実現可能であることに注意されたい。盤については、対局の方向が明示されているという点が重要である。岑順は南を向き、小人の戦争は東西方向で行われる。西南の隅に兵が逃げ込む描写は、ペルシアの大型シャトランジの盤のシタデルと類似する点が非常に興味深い。なお、復刻論文で大大将棋の復刻を行う際に仮説とした成りのルール（すぐ下の駒に成る）も、ペルシアの大型シャトランジと類似することを指摘しておく。岑順が天子の比喩であることの記述は、随所に見られる。たとえば、以下の記述である。『・・・、一騎が走り寄って王からの言葉を伝えた。「陰陽は交錯するもの、その機をとらえた者は栄えるとか。天威堂々と、疾風のおしよせるごとく、一戦して勝利をおさめたが、貴殿にはいかが見られたか」』天の様相が大型将棋の対局として地に写され、それを天子（岑順）が見ているという状況を表現するものであろう。

Ⅶ. 大型将棋の小型化と31枚の駒

反駁論文Ⅳ章の第７段落には、「・・平安小将棋から大型将棋が成立する変遷感でも理解可能であるし、どちらかというと大将棋、摩訶大将棋創作の同時性を物語る証拠となるのではないだろうか。」とある。

摩訶大将棋から一定の駒数31枚ずつが取り除かれていき、大将棋を経て、平安大将棋が成立する。また、摩訶大将棋から大大将棋への変化は、31枚の駒が取り除かれた上で、新たな31枚が追加される。これは、摩訶大将棋と大大将棋の駒数が同じ96枚（片側）であるからである。この過程の詳細は復刻論文を参照されたい。この事実から結論できることは、大型将棋から小型の将棋が順次作られていったということである。変化の方向は大型から小型への一方向であり、逆向きに起こることはあり得ない。これは、摩訶大将棋起源説が正しいことを示す大きな根拠なのである。

しかし、反駁論文では、小型から大型への逆向きの変化でも理解可能であるとする。その逆向きの変化がどのような手順で進むのか、清水氏は文章上だけの反論ではなく、具体的にその

プロセスを示す必要があろう[3)]。どのように解釈すれば、小将棋から31枚の塊で駒を追加して、最終的に整然とした陰陽の駒の動きと配置、十二支と十干の駒グループを構成できるのだろうか。摩訶大将棋や大大将棋がきれいな初期配置と六十干支を示すのは、それが一番はじめに設計された将棋だからである。後になって作られた大将棋や平安大将棋には、陰陽の対称性は保たれているものの、十二支と十干の構成は明らかに崩れているのである。

さて、以下の文章は復刻論文からの引用である。「このように、随所に31枚の駒の取り除きが見られること自体、仕組まれた何らかがあることを連想させるのである。つまり、将棋が変わっていくのは、純粋に遊戯の改良という観点で行われたわけではなかった。面白くするということが目的であれば、31枚に拘る必要はないのである。」では、この31枚の意味は何かということが問題となろう。詳細は論文発表を待っていただくとして、以下、31についての「私見」の一部である。

31は５、７、５、７、７の31文字を使う和歌に由来するものと見る。和歌は文学あるいは文芸と言うべき領域のものであるが、古代においては和歌を読む行為のすべてが果たして文学、文芸だったのかどうか。古代と現代とでは、その存在の意味合いが違うという点において、和歌は大型将棋と類似する。これまで遊戯と思われていた大型将棋は、復刻論文に指摘のとおり、六十干支の駒を使う一種の呪術のツールだった。同じように、和歌もまた現代の和歌の役割だけを想定すべきではなかろう。

ここで問題とするのは拾遺和歌集の巻第十八にある次の和歌である。

詞書
東宮の石などりの石召しければ、三十一を包みて、一つに一文字を書きて参らせける
苔むさば　拾ひも替へむ　さざれ石の数を皆取る　齢幾世ぞ

この和歌は読み人知らずとあるが、三十六歌仙のひとり、小大君（こおおきみ）の作とされる。小大君は東宮時代の三条天皇に長く仕えた。上の和歌にある31個の石は三条天皇に対して献上されたものであろう。それぞれの石には文字が1文字ずつ書かれており、31個まとめて布に包まれた。ところで、この和歌を題材とした蒔絵が存在するのである。図３に示された双六盤には、４つの側面がこの蒔絵で装飾されている[4)]。和歌に詠まれている布は金貝で表現され、ちょうど31個の石が円形で描かれている。和歌のとおり、それぞれの石には一文字が書かれている。小大君の和歌に詠まれている石と同じように、31枚の将棋の駒が皇太子もしくは天皇に献上されたという状況を想定している。

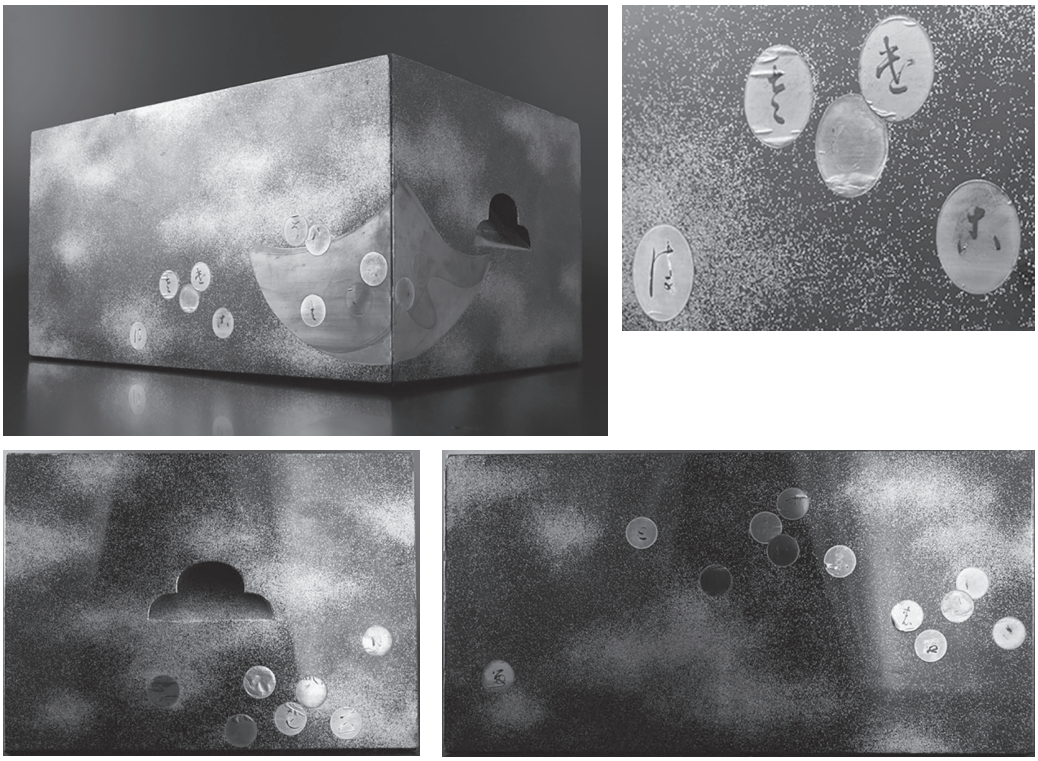


図３．蒔絵の双六盤.左上）長辺の側面の中央に集まる５個の石が上の句のはじめの５文字（こけむさは）である。金貝の上の７個の石が下の句の最後の７文字（よはいいくよそ）である。和歌の順は側面を時計回りに辿ればよい。左下）上の句の７個の石（ひろひもかへむ)、右下）右に集まる５個の石が上の句の最後の５文字（さされ石の)。左側に下の句のはじめの７文字（かすをみなとる）がある。右上）上の句はじめの５文字の拡大。

Ⅷ. 大型将棋の対局と天変地異

反駁論文Ⅳ章の第９段落には「翌十一日天候が回復した日にも「将碁」は指されるし、そのほか特に災害が起こっていない日にも「将碁」は指されている」とある。反駁論文では、明月記の将碁を指したという記述が、直前に書かれている洪水の記述とは関係がないという立場を取るようである。本稿Ⅵ章やⅦ章と同様、文学の記述をどのように汲み取るかの問題となる。結局のところ、個々の研究者の「私見」によるため、結論は導けないとしておくが、本稿では、岑順の物語と同じく将棋史の資料になり得るという立場を取りたい。

関連する記述については、復刻論文と明月記の原典を参照されたい。以下、簡略に述べる。

五月十日の条は次のように始まる。「十日。夜より、甚雨注ぐが如し。終日休まず。河水大いに溢る。番に依り、格子を上ぐるために参上す。殿下出でおはします。御前に於て将碁を指し、三盤了んぬ」この日の記述からは、洪水と将棋は一連の出来事でしかあり得ないと考える。大きな洪水が起こった、ところで、話は変わるが、この日、将棋をした、という日記が果たしてあるのだろうか。このあとも「・・・河水大に溢る。蓬屋殆んど池の如し。密々川原の方に向ひ、之を見る。」と続く。ある人物の死を聞いて、「・・・世上の無常、悲しみて余りあり。此の事を聞き、心神弥々憫然たり。沫泡の身、誰人か止むべけんや。嗟乎、哀しき哉。」というのがこの日の日記なのである。

明月記では、この月は23日まで４回の将棋対局の記述が続いている。反駁論文では、災害が起こっていない日にも「将碁」は指されていると指摘するのであるが、大きな洪水の影響が、それは心情的なものであるにせよ、その後の２週間はなお続いていたと見る方が自然ではないだろうか。事実、26日の条には「自夜甚雨、終日如注、河水又溢云々、堀河大路偏如海、所々橋悉流失云々、出七條以北粗見之」とある。８丈（約24メートル）の堀川大路は海のようであり橋も流されるという状況だったのである。

Ⅸ．その他の論点

１．古代の桂馬の動き

反駁論文Ⅲ章の２節（以下、Ⅲの２）には、次のようにある。「・・・平安将棋から現行将棋、はてはチャトランガ、象棋などに桂馬相当駒が存在する「桂馬」の動きの評価が短絡的にすぎるように感じられる。」

反駁論文Ⅲの２では、象戯圖に記載される桂馬の朱点（行き先の表示）の位置について、それは、斜め45度ではない、角度がやや内側に（少し真上の方に）向いている云々の主張がある。我々は飛龍と同じ方向に朱点が並ぶと見る。清水氏はそうでないと言う。これは、十二支の駒のところでも述べたとおり、水掛け論であり学術的議論にならない。研究の方向性を宣言しているにすぎないのだから、以下、互いの研究の行末を問題視してみたい。

まず、反駁論文の方から検討するが、Ⅲの２の引用からも読み取れるように、古代の桂馬の動きは、現代将棋の桂馬の動きと同じであるとする。この動きは中国象棋の馬やチェスのナイトの動きにも含まれていることからも妥当であるとする。だから、桂馬の動き＝飛龍の前方の

動きだとするのは、たとえ象戯圖の朱点の位置がその動きを表示していたとしても、短絡的にすぎると言うのである。なお、反駁論文では、古代の桂馬に関する我々の復刻結果の主要点、つまり、桂馬が踊り駒であることについては一切言及していない。桂馬は踊り駒であり、一手で敵駒2枚を取ることができる。踊り駒であるという復刻結果自体が、そもそも馬やナイトとは大きく異なるということに注意されたい。

さて、古代の桂馬の動きは現代将棋の桂馬の動きと同じなのだろうか。古代の桂馬の動きを記述する文献は、現時点では二中歴しかなく「桂馬前角超一目」の記述のみである。我々はこの記述を飛龍の前方の動きと見る。清水氏は現代の桂馬の動きと見る。この点からは、議論は水掛け論であり、これ以上は進まない。

観点を変えてみよう。清水氏は中国象棋の馬が「八方桂」の動きであるとする。古代中国象棋の「馬」が「八方桂」の動きだったかどうかは不明であるがここでは問題にしない。「馬」の動きが伝来してきているのだから、桂馬の動きも類似しているはずだというのが反駁論文の主張点である。実は、ここに大きな問題が潜む。「馬」の動きが伝来したのだとすれば、桂馬もまた「八方桂」の動きでなければならないが、そうではなく、桂馬は八方桂の前方だけの動きである。清水氏は、この点をどのように解釈するのか。その答えとしては、この問題はすでに文献［12］で答えが出ているという立場を取っている。ところが、文献［12］には「私見」が述べられているだけであり検証はない。古代と現代の桂馬の動きが同じであるいう主張には、ともかくも検証が必要であろう。

一方で、古代の桂馬が踊り駒であり、動きは飛龍の前方動きと同じであるとの説を検討してみよう。摩訶大将棋や大将棋における初期配置からわかるとおり、踊り駒の配置はこの２つの将棋とも整然とした配置であり、桂馬の位置に、踊り駒でない駒が配置されていたとしたら不自然さは否めない。摩訶大将棋では、歩兵の２つ下の段に踊り駒だけが並ぶ。大将棋では端から２つ目の列、歩兵の下には踊り駒だけが並ぶ。ところで、踊り駒のルールは、同じ動きを２回または３回くり返すことで規定されている。そのため、現代の桂馬の動きのように動きの方向が２つ混ざることはあり得ないのである。

もうひとつの自然な考え方として、仮に古代と現代の桂馬の動きが同じであるとすれば、大型将棋には、八方桂の動きが必ず存在したはずであろう。駒の動きは、基本的に前後対称の動きとして作られるが、駒数が多い将棋では動きの割り当てができなくなるために、前後対称の駒の動きを基にして前方だけに動く駒が作られる[5)]。この例のひとつが、飛龍の前方だけの動きとしての桂馬なのである。したがって、八方桂の前方だけの動きがあるのに、八方桂の動き

がないのは不合理であろう。以上のように、古代の桂馬は、八方桂の前方動きではなく、飛龍の前方動きと考えた方が妥当である。こうした視点に立った上で、再度、象戯圖の桂馬に付く朱点の検討がなされるべきであろう。

２．古代の銀将の動き

反駁論文Ⅲ章の３節には、「・・古将棋図にみられる駒の動きを批判検討する必要性は認めるが、これを変更するのはさすがに過度な資料操作であるとの誹りを免れない」とある。学術研究においては、軽度にせよ過度にせよ資料操作はあり得るはずもなく、この文面の真意は不明である。この部分は除いて考えることにする。銀将に関する議論に齟齬があるとすれば、清水氏が対象とする銀将は、二中歴に登場する13世紀以降の銀将であり、我々が対象とする銀将は９世紀の銀将であるという点である。復刻論文の中心テーマは摩訶大将棋起源説であり、時代は11世紀の小将棋旧興福寺出土駒よりもずっと前の時代が対象である。また、将棋盤と初期平安京の条坊との一致があることからも時代は二中歴よりもずっと古い。二中歴の記述を議論するとしても、まず９世紀の銀将と13世紀の銀将が同じ動きなのかどうかを検証する必要があろう。反駁論文では、この時代のずれを全く意識していない。

時代のずれのことはしばらく問わず、ともあれ反駁論文では、二中歴に記述される銀将の動きを絶対に正しいと見ている。だから、駒の陰陽五行から導かれた、二中歴の記載とは異なる銀将の動き、どの古文書にも記載されていない動き、それを「資料操作」と呼ぶのだろう。しかし、そこには、駒の陰陽五行の再検討も、二中歴の記述の再検討もなされていないのである。

ここで、二中歴に記述されている銅将と鉄将の動きを見てみよう。銅将の動きは前後左右に１マスと記載される。鉄将は前と左右と斜め前に１マスとある。銅将は中将棋と大将棋にもある駒、鉄将は大将棋の駒であるが、二中歴の記載は中将棋や大将棋での動きとは全く違っているのである。これを二中歴の記述の間違いと見るか、動きが変わったと見るか。仮に記述が間違いだとすれば、二中歴の銀将の動きにも信頼は置けないであろう。仮に記述が正しいとすれば、それは駒の動きが変わったことを示すものであり、銀将の動きも後世において変わったと考えて何も問題はない。このように、二中歴の記述をもって、古代と現代の銀将の動きを同じであると結論するのはむずかしい。

反駁論文では、銀将の動きの根拠として、二中歴以外に、マックルックのコーンの動き[13]と、11世紀前半の北インドの「象」の動き［14］の２例を挙げる。しかし、どちらも根拠とはできない例なのである。前者は中世の銀将の動きが、逆に東南アジアの方に伝搬したものとして問

題なく説明できる。つまり、日本の将棋の方が古かったということである。摩訶大将棋の成立時期を考えれば自然な想定であろう。マックルックは成立時期自体が不明であり、まず東南アジアの古代文化史の究明が先決となろう。後者については、文献［14］の著者マレーが導いた結果ではなく、「象」が銀将と同じ動きで動いていた対局を、アル・ビールーニが見たという情報にすぎないのである。このような伝聞に基づくだけであれば「仮説」にもなり得ない。また、同じ文献中には、次のような一節もある。Falkener suggested that al-Beruni must have obtained it from Japanese chess!（日本の将棋から来たものに違いない）と言うのである。以上のとおり、銀将の動きが古代からずっと同じだったという検証は困難である。

次に、古代と現代の銀将が異なる動きだったとする仮説を見てみよう。復刻論文では、銀将は前後左右と斜め後ろに動くと結論している。この銀将の動きは、金将の動き（前後左右と斜め前に動く）と対応しており、金将とは前後反転の動きとして設計されたものと見る。古代日本においては、金と銀は、将棋の駒に限らず、陰陽のペアである。図４に摩訶大将棋の初期配置の中央下部分と駒の動きを示した。

図４の上図は、象戯圖やその他の古文書の記載に基づき、駒の動き復刻した図である。詳細については復刻論文を参照されたい。古代の将棋では、すべての古文書のすべての将棋種において、記載される駒の動きにはいくつかの間違いが見られる。そのため、ひとつの古文書のひとつの将棋種だけを参照して動きを決定するべきではなく、古文書を横断的に比較し検討することが重要となる。反駁論文に「資料操作」云々とある、その資料とはどの古文書を指しているのであろうか。

なお、大型将棋を遊戯的な側面から見れば、個々の駒の動きが自由に設計され、配置と動きに対応がほとんどないということはあり得ないと考える。無意味な配置と動きを取るならば、駒数の多さのためにルールが覚えられないのである。たとえば、図４の上図を見ていただきたい。古猿の動きは多くの古文書の情報から見て、この動きで妥当である。ここで、古猿の左にある臥龍の動きを見てみよう。古猿と陰陽のペアをなす臥龍が、現代の銀将の動き（＝古猿の動きと上下反転の動き）であるからこそ、動きのルールは覚えやすいのである。同じように、横に並ぶ金将と銀将が上下反転の動きであるからこそ覚えやすい。こうした状況の中で、摩訶大将棋の銀将が現代の動きであるとするならば、その動きは、古猿の動きの上下反転である。五行から十干が作られるため、陰陽のペアは同じ五行のグループに属していなければならない。将の駒（人の駒）と動物の駒が陰陽のペアになることはないのである。また、陰陽のペアは隣接または左右対称位置にあることが原則である。

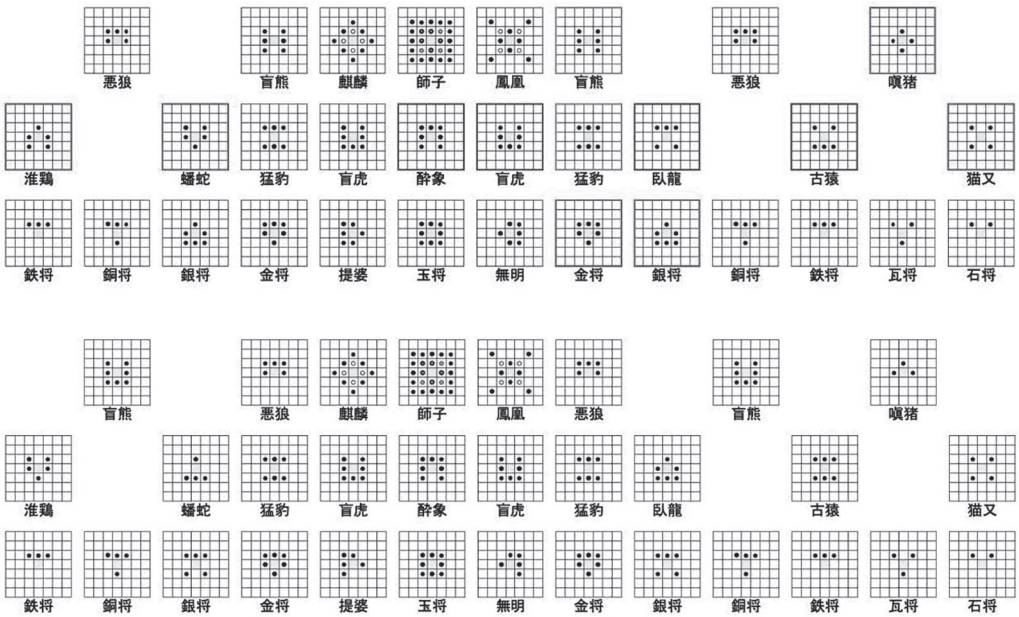


図４．摩訶大将棋の初期配置と駒の動き．上）復刻後、下）象戯圖の記載どおり。象戯圖に記載される動きは明らかに間違いであることから、象戯圖の延年大将棋や大大将棋の記載および江戸時代の他の古文書を参照しつつ検討が必要となる。詳細は復刻論文を参照されたい。復刻後（上図）の動きの要点は、左右対称位置または隣接する位置に、陰陽の駒（駒の動きに対称性をもつ）が配置されることである。たとえば、古猿と臥龍は駒の動きからも名称（動物の駒）からも陰陽のペアを形成する。同じように、酔象と盲虎、猛豹と盲熊も動物の駒の陰陽である。人の駒では、金将と銀将、銅将と鉄将等が陰陽のペアを形成している。

X．おわりに

本稿はすべての章において反駁論文への反論となった。それは、反駁論文がそうであるのと同じである。当然のことながら、摩訶大将棋起源説と平安小将棋起源説が並び立つことはあり得ず、一方が正しく一方が間違い、または、両方の説が間違いということになろう。

本稿では、歩兵が３列目に並ぶという配置の問題、11世紀の酔象の出土をどの将棋種に対応させるかの問題については触れなかったが、これらについては、別論文にて発表する。

摩訶大将棋起源説が、「私見」から「仮説」になり得たのは、考古学から将棋史学への寄与によるところも大きい。それは将棋の出土駒からではなく、初期平安京［３］や初期平城京［15］［16］の復原からの知見による。９世紀の平安京を将棋盤と見ることで、摩訶大将棋や大大将

棋の初期配置を説明することができるのである。ところで、摩訶大将棋起源説が正しいとなれば、呪術としての大型将棋の存在が立証される。それと同時に、平安京に内在する呪術性も明らかとなるのである。つまり、これは逆に将棋史学から考古学への寄与ということになる。

謝辞

本稿の内容の一部は、2020年度科研費：挑戦的研究（萌芽）「古代日本の大型将棋に関する研究」（研究代表者：高見友幸）による研究成果に基づいている。

〔注記〕

1）検証されていない説にもかかわらず、一般的には正しい説だと思われていることがある。その説に多くの賛同者がいたということであり、これが「通説」である。ただし、将棋史の研究者は非常に少なく、ここで言う賛同者とは将棋を愛好する人々であり、そうした中での多数決の結果が通説と言ってよいであろう。将棋史の研究者が通説を決めているわけではない。

2）この点については、反駁論文（Ⅲの１）に多くの例が挙げられているものの、どれも大きな意味を持たないため、注記にて取り上げる。横飛と瓦将の２駒が六十干支にないのは、摩訶大将棋の駒が50種であることから当然の結果である。各五行は12種の駒グループで、そのうちの１グループは成駒であるから、48種の駒で十分なのである。横飛と瓦将は、原摩訶大将棋にはなく、その後に追加された駒であろう（文献［６］を参照されたい）。銀将以下６種の駒がどの古文書にもない動きとあるが、この６種は歩き駒であり、残された駒の動きに当てはめることで容易に復刻が可能である（復刻論文２－３節を参照されたい）。対称の動きになっていないと指摘されている「羅刹－夜叉」以下の８対の駒については、本稿著者は対称と見ており、水掛け論となろう。

3）反駁論文の文面から推察すると、あるいは清水氏も逆向きの変化は無理だと思っているかも知れない。そこで、「どちらかというと・・・同時性を物語る証拠」云々と、つまり、摩訶大将棋と小将棋が同時に成立した可能性を持ち出しているようにも見える。しかし、文献［２］［４］および本稿Ⅲ章で示される次の３つの点から、いくつかの大型将棋が同時期に成立したとする考え方はむずかしい。ａ）交点置き摩訶大将棋から時期を隔てて、マス置き摩訶大将棋が実現すること、ｂ）大大将棋の狛犬と師子は左右に並ぶ配置を取るが、摩訶大将棋では縦に並ぶことから（つまり、古式の配置）、２つの将棋に時代の差が見られること、ｃ）二中歴には大型将棋として平安大将棋１種だけの記述であるが、この頃には大将棋よりも大型の将棋はすでに主流ではなかったと見られること等を、各大型将棋の成立時期の間に差があることの証拠として挙げることができる。

4）大阪電気通信大学木子研究室所蔵の双六盤である。金貝を大胆に使う技法や、古典文学を題材に使うのは琳派の蒔絵の特徴である。非常に貴重な双六盤であると思われるが、古美術商からの購入であり、この双六盤に関する情報については一切不明である。

5）大大将棋の駒の一部の例外を除けば、駒の名前が違えば、駒の動きも違うというのが駒の動きのルールである。したがって、駒数が増えると、使うことのできる駒の動きがなくなるために、前後対称の動きを前だけの動きにするという方法が取られている。たとえば、嗔猪の前方だけの動きが石将、猛豹の前方だけの動きが鉄将、反車の前方だけの動きが香車、飛龍の前方だけの動きが桂馬である。

〔参考文献〕

［１］清水康二，摩訶大将棋起源説反駁，大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要第22号，111-131，2020.

［２］高見友幸，摩訶大将棋の復刻 ～古代日本の大型将棋に関する考察～，大阪商業大学アミューズメント産業研究所，研究叢書第19巻，2019.

［３］瀧浪貞子，初期平安京の構造－第一次平安京と第二次平安京－，京都市歴史資料館紀要，1984.

［４］高見友幸，中根康之，木子香，原久子，呪術としての大型将棋に関する考察，大阪電気通信大学人間科学研究，Vol.22，13-24，2020.

［５］高見友幸，初期平安京の復原～都城の思想と大型将棋の将棋盤～，国際ICT利用研究学会論文誌，Vol.4，18-28，2020.

［６］高見友幸，大型将棋の将棋盤と平安京の条坊：初期平安京の復原，大阪電気通信大学人間科学研究，Vol.23，1-13，2021.

［７］清水康二，東アジア盤上遊戯史研究，明治大学大学院文学研究科 2016年度博士学位論文，2017.

［８］高見友幸，最近発見された摩訶大将棋に関する古文書，IR＊ゲーミング学会ニューズレター，No.38，8-11，2019.

［９］高見友幸，古代都城の設計と天円地方の思想 ——平安京正方形仮説の考察——，ゲーム学会第18回合同研究会研究報告，5-9，2021.

［10］末松剛，初期平安京について：「第一次平安京」説の再検討，社会科学（同志社大学人文科学研究所），50（1），1-21，2020.

［11］高見友幸，平安大将棋と中国象棋の関連性，ゲーム学会第18回合同研究会研究報告，10-11，2021.

［12］木村義徳，持駒使用の謎 日本将棋の起源，日本将棋連盟，2001.

［13］ランドルフ アレックス，将棋とチェス（1） 将棋とチェスの歴史の一面，将棋世界1971年３月号，1971.

［14］H.J.R.Murray, A History of Chess, Oxford University Press, 1913.

［15］山川均，XT 調査区（平城京十条発掘調査報告書－平城京左京一・二坊及び羅城の調査－），大和郡山市教育委員会・（公財）元興寺文化財研究所，2014.

［16］山川均，平城京歴史講座，2019.6.8.